

おだわら
情報

生誕160年、益田鈍翁の記憶

DO YOU KNOW 鈍翁? ③

郷土文化館では今秋、益田鈍翁の生誕160年を記念して、松永記念館で特別展を開きます。

ここでは、鈍翁の人物像と、鈍翁から始まった小田原の近代茶道の歩みをシリーズで紹介します。

郷土文化館 ☎ 231377

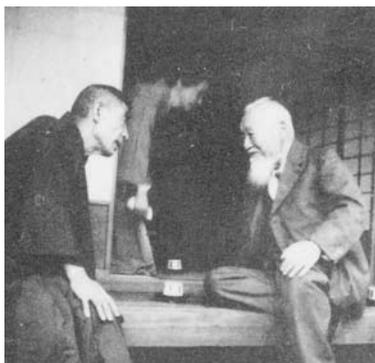
鈍翁が掃雲台に移り住むと、鈍翁と親しい山縣有朋、野崎幻庵、原三溪ら各界の名士たちも小田原、箱根に住み、別荘を構えて、茶人文化が花開きました。

鈍翁は、掃雲台で茶会を開いて人を招き、収集した美術品を惜しげもなく公開し、世間から『利休以来の大茶人』と呼ばれました。

しかし、晩年になると、その茶は次第にわびた茶へと発展し、なすことまでもが静寂を極めるという境地に達したと伝えられています。

「昨年も去年も今年も 一昨日も昨日も今日も 茶に暮らしけり……」

茶会には、後に板橋に老樗荘を建てることになる松永耳庵も呼ばれました。耳庵が茶の湯を始めたのは60歳。そのきっかけも、鈍翁がいささか強引に引き込んだ感がありました。鈍翁は耳庵の中に『近代数寄者』の後継者としての素質を見いだしていました。当初は茶道に関する知識がなかった耳庵は、実業界で見せた



柳瀬山荘に鈍翁(右)を招いた耳庵(左)

勤勉さをここでも発揮して、鈍翁の茶や古美術の知識を吸収していきました。

耳庵は後年、鈍翁の茶の湯について、「翁の茶事の特徴を為すものは客を愛し、客の喜ぶのを喜ぶと云うことである」と語っています。それは、耳庵の茶の湯の中でも、精神的な柱として大切に引き継がれていきました。

鈍翁ゆかりの品や情報をお持ちのかたがいらっしゃいましたら、ぜひ郷土文化館までご連絡ください。